

「どうしたらいいんですか」

この前、一人で歩いてたときのことやけど、いきなり後ろから押されてびっくりした。

「なんや、なんやねん。と思っっていたら、「どこに行くの。」って聞いてきたんや。」

「どこって…別に。」って答えたら、

「わからないでしょう。」って言うんや。

なんとも答えようがないんやんか。ただ歩いてただけやから。

「はあ…。」って言ったたら、

「おうちはどこ。」

中学生相手に「おうちはどこ。」はないやろ。三つか四つの小さな子どもでもあるまいし。

しょうがないから、「二丁目です。」って答えたら、

「ああ、よかった。私、少し回り道になるけど送って行ってあげる。」

「えっ…。いや、自分で行けますから。」って言ったんやけど、

「遠慮しなくてもいいのよ。さあ行きましよう。」って腕を引っ張ってどんどん歩き出したんや。

結局、勢いに引きずられて、いっしょに行ってあげたけど、もう怖くて、怖くて。

あげくのはてに、「それじゃ、私はここで。」って行ってしまった

んや。

「ここはどこやねん。わからへんがな。」

「ぼくはな、ただ一人でゆっくり歩きたかっただけなんや。」

「それだけやんか。」

「だれでもあるやろ。そんな時って。」

「そうや、こんなこともあった。」

「道を歩いているとき、いきなり飛んでくるのが、」

「頑張ってね。」

「最初、誰に言ってるのかなあって思った。」

「ぼくか…。」

「何を頑張るんや。街を歩いているだけなのに…。」

「ぼくが頑張ってるんやったら、道を歩いている人はみんな頑張ってるよ、ねえ。」

「こないだなんか、お昼を食べに行ったら言われたんや。」

「おう、兄ちゃん、頑張ってな。」

「ぼくなあ、必死でご飯食べなあかんのか。」

「悪気があって言ってるわけやないことはわかるんやけど…。」

「でもな、こんな人もいるんやで。」

「駅前の交差点、あそこ広いんや。そこで、」

「信号変わりましたよ。いっしょに行きませんか。」って声をかけて

くれて、

「えっ、ああ、お願いします。」って言ったたら、

「どうしたらいいんですか。」って聞いてくれたんや。

この「どうしたらいいんですか。」って聞いてくれる人が、なかなかおらへんのや。

「あなたの肘を持たせてください。」って頼むと、

「これでいいですか。」ってまた聞いてくれたんや。

「だから、ぼくは、「腕は自然に伸ばしていいですよ。」って言ったんや。」

「だってな、腕に力が入って、緊張してるのがわかったんやもん。」

「いっしょに歩きながら話をしたんや。声のきれいな人だな。」

「背が高いですね、どれくらいあるんですか。」って聞いたたら、

「えっ、百八センチですけど、どうしてわかるんですか。」って逆に聞かれたから、

「いや、あの、声の位置が高いし、それに肘の高さとか…。」って

言ったたら、

「ああ、そうか。そうですよね。」って逆に感心されたわ。

「交差点を渡るって、わかりにくいんですか。」って聞かれて、

「車の流れを耳で聞いて判断しないといけませんから。」って答えた

んや。

「音響信号のないところって、けっこう怖いもんな。」

「えーい、度胸だ。」って渡るときもあるし。



「渡りましたよ、今からどこへ行くんですか。」って聞かれたから、
「この先のCDショップまで。」って格好つけて言ったたら、
「いっしょに行きましようか。」って。
「いや、いいです。ここからは自分で行けますから。」って言うのと
「それじゃ、気をつけて。」って行ってしもたんや。
すっ、とね。

「かっこよかったなあ、あの去りかたは。」

「忘れてしもったもん。」「ありがとうございます。」って言うの。

出典 同和教育副読本「かがやき」 高等学校用（福岡県教育委員会）

「一緒に行きませんか」 一部改作